

## 朝のこない夜はない

—吉川英治氏におそわったこと—

評論家 扇谷正造

皆さん、こんにちは、扇谷でございます。

演題は「朝のこない夜はない」という題であります。サブタイトルは、「吉川英治氏におそわったこと」という題で、漫談であります。いつも講演を頼まれて、朝のこない夜はないと言いますと、大体10人のうち8人ぐらいまでは、「朝もこない、夜もこない」と言うんでありますが、朝もこなくて夜もこなかったら、この世はヤミでありまして、そうじゃない、夜がくれば必ず朝がくる。ヤミが深くなればなるほど夜明けは間近いということであります。

企業にとりましても、あるいは人間の一生にとりましても、いいときと悪いときとが交互になぞい合わせてやってくる。その調子の悪いとき、逆境にあるとき、不遇にあるとき、企業が不振にあるとき、そういうときでも、朝のくることを信じて、自分のペースで努力を怠ってはならないという意味であります。

## 百科事典を50回

考えてみますと、吉川英治氏の生涯、70年の生涯というのは「朝のこない夜はない」ということばを信じて、そのことばどおり実行した生涯じゃなかったかと私には思われます。

昭和22年に初めて吉川さんとお会いして、そして、37年の9月に吉川さんが亡くなるまで、ずっと私はおつき合いをしてまいりました。「週刊朝日」の編集長をやっておりましたときに、いま、NHKでやっております「新平家物語」というのが連載されまして、それを担当しておった関係もあったわけでございます。吉川さん奮闘の生活なんでありまして、何でも18ぐらいのときに初めて横浜から東京へ出て来たそうであります。本所のある印刷工場の住込み職工をしておった。その住込み職工さんの時代に、百科事典を50回読んだと言われております。このごろの百科事典、なかなか絵がはいったり、写真がはいったりしてにぎやかなんでありますが、戦前の百科事典というのは、どちらかというと、まあ無味乾燥なものであります。その無味乾燥な百科事典を50回読んだと聞いたとき、私はまさかと思っておりました。ところがある日、ある会合があって、なるほど、吉川さんは、百科事典を50回読んだなっていう感じを深くいたしましたね。昭和29年か30年

のころだったと思います。芝に「志保原」という料亭がありまして、そこで文壇人何人かと一緒に食事をしたことがあります。お料理が次々と運ばれて、さて、これでおしまいと思っていますと、もう一皿お料理が出るという。メニューを見ると、「強魚」と書いてある。「強魚」と書いてこれを何と読むのか、そして、どんなお料理が出るのかだれも知らない。石川達三なんという人は、なかなか茶目っ気のある人でありますから、

「強い魚、うん、揚子江でとれる雷魚のサンミか」

なんてことを言う。

またある作家は、

「強い魚、うん、なまずのてんぶらか」

なんて言って、だれも知らない。吉川さんだけがひとりニヤニヤ笑っている。石坂洋次郎氏が聞いた。「吉川さん、何と読むんです。そして、どんなお料理が出るんですか」吉川さん答えていわく

「これはシイザカナと読む。もうお料理はひとつおりました。しかし、もし、おなかの都合でもう一皿召し上がれるんでしたらいかがですかと強いる。だから、これはシイザカナと読む。したがって、おなかにたまるものが出ない。多分ムシガレイかなんかでしょうよ」

といいましたけれども、案の定、出されたのはムシガレイでありました。

それらの終始の模様を眺め、問答を聞きながら、なるほど、吉川さんは百科事典を50回読んだなという感じを深くいたしましたね。といいますのは、「強い魚」と書いてこれをシイザカナと読むなんていうことは、大学じゃ教えてくれない。百科事典を頼りにして、ひとつ、ひとつ自分の経験を通じてのものにしていった知識、確かめていった知識なんですね。なるほど、吉川さんは百科事典を50回読んだなという感じを深くいたしました。

## 菊の句二つ

きょうは、私は、吉川さんからいろいろ教わったものうち、幾つか抜き出しまして、そして、現代においてもお生きているであろうと思われる幾つかを抜き出して、皆さまにお話をし、ご参考にさせていただきたいと思ひます。

第1に、祝い句というやつをご紹介します。結婚式のとくによく使われる句です。この句を持っておりますと、非

常に便利だといわれている。若い人にはちょっと無理かもしれませぬけれども、ご年配の方がこれを使うと、非常にスピーチにまとまりのあるスピーチができるというわけがあります。

二つありまして、一つは新郎新婦の両親にはなむけする句、もう一つは、新郎新婦そのものに与える句であります。

新郎新婦の両親用の句といたしますのは、

“菊作り菊見の時はかげの人”

という句です。

若い2人にはなむけする句といたしますのは、

“菊根分けあとは自分の土で咲け”

二つの句がセットになっておりまして、これをスピーチのあとにつけ加えますと非常にパンチのきいた切れ味のいいスピーチになるんだそうであります。

「菊作り」の句、吉川さん、実は、結婚スピーチ用につくった句ではありませんでして、ある職人さんに与えた句なんです。大阪と京都の間に枚方という所があります。ここは、菊人形で有名であります。ある年、たいへんすばらしい平清盛の菊人形ができた。ぜひ吉川さんに見に来てほしいと、現地から希望があった。吉川さん出かけてみた。なるほど、等身大の平清盛の菊人形、すばらしいでさばえであります。見る人が口々にそれを賛嘆してその前を過ぎていく。吉川さんも一目見て

「うん、なるほどこれはすばらしい」

とほめて、そして2歩3歩通り過ぎて、ヒョイとうしろを振り返って見たら、50がらみの男の人がそこにうずくまって泣いていた。手ぬぐいを出してごしごしと涙をぬぐっていた。聞いてみると、この清盛の菊人形を作った職人さんなんですね。連日連夜一生懸命努力してやっと作り上げて、飾った。みんながほめてくれる。思わずいままでの感慨や喜びなんかぐっと吹き出してきて涙を流しておったというわけなんです。吉川さん、ひどく感動してその職人さんに与えたのがこの、

“菊作り菊見の時はかげの人”

という句なんです。

それが、結婚式における当日の新郎新婦の親の立場によく似ている。披露宴の正面には二輪の紅白の大輪の菊が咲きそろったように新郎新婦が並んでいる。それを見て参会者一同が口々にほめる。

「何てきれいなお嫁さんだ」

「何てすばらしいお婿さんだ」

とほめる。その賛嘆の声を聞いて新郎新婦の両親は、二人の子供時分のころからの追憶がどーっと吹き出してきて、思わず目がしらをジーンと熱くさせているということなんでしょうね。状況がよく似ているところから、この句が、新郎新婦のご両親様への句として使われるようになったんだと聞いております。

最近では、非常にポピュラーになりまして、広まりまして

結婚式にまいりますと、3回に1回ぐらいはだれかがこれをやりますね。中には、大胆不敵な人がおりまして

「私の近作であります」(笑)なんてことを述べられるのにはびっくりするんであります、著作権侵害もいいところでございます。

## 祝句失敗の記

朝日新聞の最後の4年間、私は、論説委員をやっておりました。論説委員というのはわりに優雅な商売でありまして、1週間に1本か2本原稿を書くと、あとは自分の部屋で本を読んでおればよろしい。

したがって、よく、大勢の方が遊びにこられる。ある日、一人の先輩がやってきた。

「扇谷君、きょうはひとつお願いがあってやってきた」

「何です」

「友人の娘が結婚するんで、自分は新婦側の代表としてあいさつを頼まれた。君、何かいいスピーチはないかね」といわれる。私は、この二つの句を紹介した。先輩非常に喜んで帰っていった。1週間ほどしてその先輩、また、私のところへ遊びに来た。

「どうでしたか、この間の結婚式の模様は」

「それがどうもね、うんうん、うん」

煮え切らない返事です。だんだん聞いてみると、私の先輩、家へ帰って吉川さんの句を織り込んで1,500字の原稿を書いた。頭にたたき込んで、ために奥さんの前でリハーサルをやってみた。しゃべり終えたら奥さんが感嘆のまなざしを向けて

「あなた、うまいわね」とほめてくれた。(笑) すっかり自信を得て会場に向かった。式は型のごとく進んで、いよいよテーブルスピーチになった。一番バッターは新郎側の代表、私の先輩は、新婦側の代表でありますから、二番バッターになるわけです。一番バッター立ち上がってしゃべった。じっと聞いておいたら何か聞いたことのあるような文句が出てきた。コレ(黒板の祝句を示す)やっちゃったと言うんですね。(爆笑) あれくらいあわてたことはなかった。(笑) まさか、自分の話は、新郎側の代表と全く同じでありますともいえないし、しどろもどろのあいさつをしてきた。(笑)

「どうも、扇谷君、吉川さんの祝句のような有名な句をやる場合には、君、先にやったほうが勝ちだね」(笑)と言うんですね。

## オコゴト・オスミニナリマシテ?

叱り上手ほめ上手ということ。人間の組織体の中において大事なことはヒューマンリレーション。そのヒューマンリレーションの問題では何かという上立つ人、あるいは何人かのスタッフを使っている人がどのように上手に叱るか、どのように上手にほめるか、励ますかという問題の

## 講演会

ようですね。

よく招かれてあちこちに講演にまいります。いつかも、ある弱電メーカーの会社に講演に行きました。女子の従業員300人ほどを集めて、そこで講演をした。

その中で一つ、こういう話をした。「どうもこのごろの女子の従業員は、仕事の上のミスで、部長さんや課長さんに叱られると泣く。いけません、男女同権、男女同一労働、同一賃金の現代においては仕事の上のミスで叱られて泣くなんていうのは職業に甘えている証拠です。泣きたかったらトイレへ行って泣きなさい。そこで一泣きしないで、それから顔を直してちゃんと配置につくように」

というようなことを言ったんです。別に変わった意見でもなんでもないんで、きわめて常識的な見解を述べたにすぎない。講演が済んで、その人事部長さんと一緒に食事をした。

すると彼いわく

「扇谷さん、きょうのお話、大体いいんですけどね、最後のところで仕事の上のミスで叱られた場合に女の子が泣くというところ、あそこ違いますねッ」

と、こういう。

「どう違うんです」

と聞いたら、

「何、このごろの女の子は泣くもんですか、泣かされるのは、こっちの方ですよ」(笑)

こういう。何があったんですと聞いてみた。

ことし、高卒の女の子、私の部に配属になった。ハキハキしたい子なんだけど、どうも落ちつきがない。会社へ来ると、直ぐ電話をとって

「モン、モン、う、う、うん」

と片っ端から友だちに電話をする。

「うん、どうしたあれから、アラン・ドロンすてきだった」

なんてことをやっている。気になって仕方がない。いつか注意しようと思っているうちに3カ月たった。ある朝、会社の出しなにおかみさんとパチパチと夫婦ケンカみたいなことをした。会社へ出た。例によって女の子、

「モンモンッ、モンモンッ」

と、こうやっている。で、彼思わず

「バカーッ」

と、叱った。簡単なケースでありますから、二言、三言も叱ったらおごとのタネは尽きる。で、彼は口をつぐんで

「うんッ」

とマを置いた。そしたら、それまで静かに頭を下げておった女の子がキュッと顔を上げた。顔を上げて、

「部長さんッ、おごとお済みになりました」(笑)

と言ってきた。

「うーん」

気が強いなと思ってたら、机の上をサッサッサッとかた

づけて

「わたくし、不愉快ですの、きょうは帰らしていただきます」

とって帰っちゃった。(笑) やめるのかと思ったら、翌日ケロッとした顔をして会社に出てくる。

「とってとても扇谷さん、このごろの女の子は叱られたぐらいで泣くもんですか。泣かされるのはこっちの方ですよ」(笑)

というのは、彼の言い分でしたね。

この小さいエピソードは、われわれにさまざまな問題を投げかけている。どういう意味でか。現代の若い人のキャラクターという問題ですね。現代の若い人は、どのようなキャラクターを持っているか。戦後の民主主義社会ならびに新教育というものは、どのような新しいキャラクターをいまの日本の若い人たちに植えつけたかという問題ですね。その点からはいっていかないと、現代の経営者、管理者層というものは的確な日常教育というものはできるはずはない、というわけですね。多くの人があげておりますのは、ほぼ三つの性格が浮き上がってきているといわれている。

一つの性格は、何かといいますと、ドライな金銭観ということですね。非常に勘定高くなってきている。別なことばでいいますと機能的人間像ということでしょうね。

もう一つの性格は、何かといいますと、どちらかという論理的にものを考えないで、感覚的に行動をする。カラカッていいますと、ホイホイ型人間像ということですね。

ホイホイ、スイスイと反応して行く。立ちどまってものを考えるというタイプが昔の人間に比べて少ない。テレビの生んだ産物だともいわれております。

それらの中で一番きわだっているキャラクターは何かといいますと、人間平等主義の徹底ということでしょうね。人間はすべて同じだ、「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」という福沢諭吉の人間平等主義の思想が深く広く浸透しているということでしょうね。この事実はよく見きわめておかないといけない。

私2、3年前に東電の群馬支社へ成人式に招かれて講演に行ったんでありますが、講演が済んで4、5人の、その若い人たちと食事をした。そのとき一人が人事部長さんに質問をしていました。どういう質問かという、

「われわれが選挙したのでもないのかかわらず、上がきめた部長、課長、係長の命令にどうして、われわれは従わねばなりませんか」

スパッと質問している。別に彼は民青でもなければ、全共闘でも何でもなし。どちらかという、おとなしい模範的な社員に属するほうですね。そのとき彼の人事部長氏は、こういう説明をしていました。

「会社の所有権はだれにあるか、株主にある。その株主の所有権を社長は株主から一任されて、一任された権限を部長、課長に委任している。だから諸君は管理職の命令に

従わねばならない」

と説明した。これだめですね。説得力きわめて弱した。

「株主から一任されたというのは、あれですか、年1回か2回の株主総会に往復はがきを出してハンコついてもらって形式的に受け取って数を集めて、それが委任になるんですか」

というふうな、きわめてそっけない返事の受取り方をされます。

第2の説明の仕方は帰順論という説明の仕方。

「結婚と職業とは、本人の選択に基づく。君はこの会社を選んだんだから、その会社の規則に従うのがあたりまえじゃないか」

という言い方ですね。これもだめです。

「私は、別に、この会社を希望したわけじゃないんですよ。会社の人事部長さんが学校に来て、君たちは金の卵だ、金の卵だ(笑)というんで、いい気持ちになって汽車に乗って上野駅に着いたら会社のトラックが迎えに来ておって、独身寮には入れたからはいっているまでのことで、私は別の会社へ行きたくった」

と、こういうふうな受取り方をする。これもだめですね。

いま一番説得力のある説明の仕方は何かといいますが、

「オーケストラのコンダクター」

という説明ですね。自治体のトップ、会社企業の経営のトップ、あるいは学校の校長先生、これらの人間の組織体のトップは何か。

「オーケストラの指揮者だ」

というんですね。管理職は、そして、この指揮者の下にあるところの交響楽団のメンバーである。そして「若い諸君は、いずれは、この交響楽団のメンバーに編成されるべき予備軍」であるというふうな言い方をすると、若い人は納得するようだというんですね。

この説明はマルクスが行なっている。マルクスはプロレタリアートがどうの、革命がどうのこうのだけじゃなくして、マルクスの文献の中に、このことばが出ているそうですね。それを見つけたのは、社会党の最高顧問の九州大学の名誉教授高橋正雄教授なんです。高橋さんが、これを書いてから、この説明が非常に広く行なわれているようであります。

この説明が説得力があるのは二つの点においてである。

一つは青年にあすへの希望をいだかせる。第二は参加しようとする意欲を起ささせる。そういう意味で、この説明の仕方はなかなかまい説明だといわれております。

このように人間平等主義の思想が徹底しているのでありますから、そういう現代において大勢いる前でガミガミとどなっては「一寸の虫にも五分の魂」というんでありますからすなおに受け取られるはずはない。どういふふうな叱り方をしたらいいのか、清水次郎長方式を用いようというんですね。

## 叱り上手の清水次郎長

幕末の剣客に山岡鉄舟という人がいた。剣と弾とを一致させて無刀流という新しい流派をつくった。この山岡鉄舟が清水次郎長のうちにしばらく滞在した。みると次郎長の子分1,000人。次郎長、まるでこれを自分の手足のように使っている。

「おい、大政」

「ヘェ」

「おい、小政」

「ヘェ」

というふうに使っている。鉄舟、ホトホト感心して次郎長に聞く。

「次郎長よ、おまえのところでみていると、おまえはまるで、子分どもを、自分の手足のように使っている。みごとというほかはない。いったいこの秘けつは何だ」

と聞かれた。すると、次郎長は、頭をかきながら、

「さあ、何でしょうかね、強いていいますならば、私は子分どもを叱る場合には、いつも自分の部屋によんで1対1で差しになって、まず相手をほめて、それから文句をいうようにしています」と言ったと言うんです。

たとえば、けんかばかりしている森の石松を叱る場合には、

「おい石松、ちょっと来てくれ」

「ヘェ親分、何です」

とやってくる。2人っきりになったところで、

「石松よ、おまえは気性のサッパリしたいい野郎だ。おまえの気性はたとえば竹をスパーッと割ったような感じがする。しかしおまえは少しバカだ」

と、こう言うといいんだそうですね。(笑)

そうすると竹をスパーッと割ったような気性っていうのがジーンと胸にありますから、バカと言われても、さして抵抗を感じない。すなおに、

「ヘェ親分、わっしのどこがバカなんでい……」

てなこと、すなおに聞いてくれるというんですね。

だからさっきの部長さんもガミガミと感情的に叱らないで、昼休みまで待つ。昼になったところで、

「おう、君、ちょっとお茶飲みにいこう」

と女の子を連れ出す。2人っきりになったところで何かみつけてほめる。何にもなくとも心を鬼にしてほめるのが(爆笑)これ管理職なんですね。

「君のミニなかなかいいね。このミニのチェックの模様なかなかいいよ」

なんてことをいってみる。すると、

「これ、この間デパートで買ってきたんです」

なんてことをいう。

「実はネ、君に前から言おうと思ってたんだけど、きょうはひとつアドバイスするんだ。それは電話だよ。私用の

## 講演会

電話を使って料金がもったいないなんてケチなことをぼくはいうんじゃないんだ。君が電話をかけてると、よそから会社にかかってくる電話が全部ストップする。これじゃ会社の仕事が入りまじいからね。なるべく私用の電話は、あの廊下の赤電話を使ったほうがいいんじゃないか

っていうふうにいうと、

「はあ、気がつきませんでした。これからそうします」  
ってこういうふうにすなおに受け取ると思います。決め手は何か、最初にほめるということですよ。

## ほめ上手の加藤清正

ほめる場合には、加藤清正方式を用いる。地方に講演にまいりまして圧倒的に感じますことは、殿様でもって圧倒的に評判がいいのは、信州あるいは山梨県にまいりますと、武田信玄ですね。機山公、圧倒的ですね。神様ですね、これは。

九州へまいりますと加藤清正です。ことに肥後、熊本にまいりますと圧倒的に加藤清正ですね。加藤清正はいったい肥後の国を何年間領有したか。わずか24年です。加藤清正のうちには2代目の忠広のときに断絶して、わずか2代。しかも1代目の加藤清正は領有こそ24年でありましたけれども、実際に治めたのはわずかに13年ですね。朝鮮征伐に行ったり名古屋城を造ったり、あるいは大阪城を造ったりしたんで、わずか13年しか加藤清正は政治をとらなかつた。しかし、その13年の間に非常にすばらしい行政をしいたんですね。たとえば土木工事ですね。どういうことをやったかといいますと、熊本県の南のほうには阿蘇山、この山から2本の川が流れている。大川、白川という2本の川を、清正はこれを蛇行させた。そして、熊本の市内に注がせた。途中に池をつくった。もちろんこれはカンガイ用の意味でもあります。しかし、もう一つ別なねらいがあった。阿蘇山は火山です。雨が降ると、土砂がいっせいに川に流れる。流れた水は蛇行している間に土砂が沈殿して行って、やがて熊本市内に着くころには、きれいな水になっては行っていく。白川、大川という川をつくったというんです。ところが、戦後どうなのか知りませんが、この川を直行させた。そうしたら、土砂がダアアッと流れて、昭和36年か何かに、熊本市内の3分の1が土砂にうずまったというんです。こういう考え方を、われわれは和学と言っているんです。科学に対して和学。自然の勢い、自然の勢に沿いながら人間の知恵を働かせていくき方ですね。自然と対決するのではなくして、自然と合った形でやっていくということでしょうね。

武田信玄が非常に評判がいいのも、一つは信玄堤でしょうね。信玄堤とは何かといいますと、土手を切る、プツンプツンと少し切る。水がいっぱいになってくると、その切れた部分からチョロ、チョロ、チョロと水が流れて行く。部分的にそうすることによって堤防の大決壊を免がれる。

川の外のほうには竹を植えて、堤防の上からあふれ出た水と同時に流れてくるさまざまなものを、この竹林でもってひっかける。したがって、田畑へ流れる水は竹やぶでこした水だけが流れていくというき方ですね。二つの川の合流点のところには石を敷いて、ダーンとぶつかっても絶対にくずれないようにする。これを信玄堤という。

そのような清正や信玄の土木工学的な公式が、今日においても残っている。それがたたえられているのかもしれない。

なにしろ熊本では、どんな芝居でも加藤清正が出てこないと入りが悪いんですね。忠臣蔵にも（笑）加藤清正が出てくる。私は、どういうふうに出すのか聞いてみた。

「忠臣蔵にどういうふうにして加藤清正を出すんですか」と聞いてみた。「忠臣蔵」の何段目か、キリのいいところで、座頭が加藤清正にふんして、たった一人舞台に出てくる。片鎌の槍を持って出てくる。ひとことセリフをいう。何ということ言うと、

「さしたる用もなければ……」

と言うんですってね。なるほどそうだ、忠臣蔵に関係がないものね。（笑）そう言ってから

「やあ！やあ！」

と片鎌の槍を3回しごとく、「ワァーッ」とわく。そのわいたのをしおに舞台を出ていくんだそうです。この一幕がないとはいらない。

また熊本県では、絶対に知事が4選はできないという。それはどうしてか。終戦直後に桜井三郎という知事さんがいた。3選知事です。この知事さん4選目に立候補した。3選知事でありますから、4選目強い、強い、メッポウ強い。4選阻止を叫んで寺本弘作氏が立った。とても、歯が立たない。そうしたら、寺本派の参謀が非常にうまいことを考えついた。投票日の一週間ほど前に、全県下に、「4選反対」と書いてポスターをはった。どういう文句を書いたかという、

「清正公さえ13年、16年とは長かるべい」（笑）

4期だと16年ですね。加藤清正さえ13年なのに、あなたのような凡人が、16年間とは長いじゃありませんか。

（笑）これが通った。4選をついに阻止した。3期やったけど、自分は、「清正公さえ13年」といった方だから、4選目はとうとう立候補しないで新しい知事が出た。いまの知事さんも、おそらく3選だったら、また4選やめるだろうというんです。（笑）

清正の家来に、飯田覚兵衛という剛勇無双の侍がいた。清正の子供の忠広の時代に暇をもらってやめた。

音に聞こえた剛勇の士でありますから、若い侍たちがさまざまな彼の人生経験を聞く。それが、いま門人雑記門人筆記という形で残っている。その中で覚兵衛がこういふことを言っている。

——自分は生涯において、50数たび戦場に出た。しかし、

いまだかつて1回も戦場はこわくない、合戦はこわくない  
 と思ったことはなかった。毎回、ああいやだ、いやだ、い  
 やだと思って戦場に来たものであった。しかし、さて戦場  
 に出る。ダダーンという鉄砲の響き、矢玉のうなり。わあ  
 ーんというときの声を聞くと、つい思わず敵味方、相乱れ  
 て、刀を抜いてワァーッと切り結ぶ。2時間、ときとして  
 3時間決闘が続く。やがてある時間がくるとシーンとする。  
 見ると敵味方の死体が、一面に倒れている。やれ、合戦が  
 済んだか、やれ今回も命拾いをしたか……と思うと、ヘタ  
 ヘタと自分は大地に腰をおろす。両眼から理由の知れない  
 涙が流れてくる。しばらくして、ひょいと見ると、敵の武  
 将の首が、ゴロゴロころがっている。この首を持って今回  
 こそ、これをお土産に清正公様からお暇をもらって国へ帰  
 って、百姓でもして静かに暮そうと、こう思って、とぼと  
 ぼ本陣に向かって歩いて行く。すると清正は、いち早く覚  
 兵衛の姿を見つけ大音声ではめる。

「飯田覚兵衛、なんじの武功、本日一番なり、それ褒美  
 をとらず」

こういうと小姓がバラバラッと駆けて来て、陣羽織を  
 くれる、脇差をくれる。そうすると覚兵衛は「いまさら私  
 は命が惜しゅうございます。国に帰って百姓いたします」  
 とはいえなくなる。ハハァーハァと拝領し、かくて清正公  
 様ご在世の間は、自分は清正公様にたまされたまされ相仕  
 え申し候也、かくいいて覚兵衛、ハラハラと落涙しおわん  
 ぬ、と書いてあるんです。

この“たまされたまされ”というところが、なかなか私  
 はいいとこじゃないかと思うんですね。どういふことか、  
 それは。おそらく清正だって戦争は嫌いだったに違いない。  
 個人的な気持からいふならば、彼だって合戦に明け暮れす  
 るよりは、いとしい妻子のそばにおいて安穏な生活がした  
 かったに違いない。いや、清正公だけではない。戦国の武  
 将は、いずれもそれを同じ感懐にしておったに違いない。  
 なぜなら、あの戦争上手、戦争好きといわれた上杉謙信は、  
 いつもかぶとの下に一句の和歌を込めておった。その和歌  
 とは何であったか。

取るも憂し、取らねば物の数ならず

それを手にしなかったならば、あいつはばかだ、一人前  
 の武士じゃないといわれる。

取るも憂し、取らねば物の数ならず

捨つべきものは弓矢なりけり

という古歌を、彼はかぶとの中に置いておったというん  
 です。

戦国時代における合戦の世相というものと、人間的なも  
 のとの矛盾を、ひしひしと謙信は感じながらも行なった。  
 もし合戦をしなかったならば、こちらがやられてしまうか  
 らですね。

そういうことを清正も感じ、各武将が感じておるがゆえ

に、覚兵衛がやめたいということはすぐわかる。すぐわか  
 るから、

「覚兵衛でかした」

という清正の気持もこちらがよくわかるから、

「たまされ、たまされ」と思いながらも、

「清正公様」

ということばが出ると、つい彼は追慕の涙をハラハラと  
 流すわけですね。こういうところが、私は人間の深い意味  
 での相互理解の立場じゃないかと思うんです。

大阪夏の陣、後藤又兵衛の陣屋です。

あしたは天下分け目の合戦、10中のうち8、9分どおり  
 大阪方は負けることは承知ですね。徳川方は十重二十重に  
 大阪城を囲んでいる。後藤又兵衛夕方になって、たった1  
 人、腰をかがめて何やら大声でいいながら廻っている。耳  
 を澄まして聞くと、

「明朝のことお願い申し上げ」

それは、何を意味するのか？ あしたは、いよいよ決戦  
 である。たのむ。大阪方は、全部討ち死にするであろう。  
 自分も武士の最後としてここで花々しく斬り死にするつも  
 りである。ついては、おまえたちもおれに命を任してくれ  
 ないかということですね。それを、短いことばで

「明朝のことお願い申し上げ」といって歩いた。

第1列目の幕舎のときは、又兵衛1人で廻った。3列、  
 4列目になったとき、又兵衛のあとから5人、6人と続い  
 た。そして最後の幕舎に行くころには、数十人の旗本がそ  
 のあとについて行った。あたかも合唱するかのよう

「明朝のことお願い申し上げ」という声が、あたかもコ  
 ーラスのように響いた。

……夜が明けた。徳川方は、十重二十重に大阪勢を囲ん  
 でいる。見ると、後藤又兵衛の陣屋、粛として声がない。  
 声がないけれどもその幕舎から満々たる殺気が立ち上がっ  
 ている。やがて、合戦が始まった。又兵衛が先頭をきって、  
 徳川家康の本陣に斬り込みをかける。そして、ほとんど後  
 藤又兵衛の大半の将兵が、この戦いで斬り死にするんです  
 ね。こういう場合には、大体、足軽までが逃げるものであ  
 りますけれども、その足軽の大半がそこで斬り死にをした  
 というのです。そして手傷を負って生き残った連中がいま  
 のような話を記録にとどめている。

これらは何を物語るか、企業内、組織体内における、人  
 間と人間とのヒューマン関係は、終局においては、お互い  
 がお互いを理解し合うということですね。相互信頼という  
 ことこそが、基調であらねばならないということを書いて  
 いるのではないかと思います。

時間がまいったようであります。私の話これで終わります。  
 ご清聴まことにありがとうございます。(拍手)

(本稿は昭和47年9月29日北海道支部主催の講演会で行なわれ  
 た講演を土質工学会「土と基礎」編集委員会でまとめたものです)